説教20210131　　ルカ4：21-32　408 21-136 509

「驚きの展開」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

古代の司教ティルトリアヌスは、「不条理なるがゆえに我信ず」、と言いました。神のなさることは人にははかり知ることが出来ません。人の目には神の業は不条理で驚くべきことであります。しかし、そうだからこそ神は神であって、わたしはその神を信じる、という事です。

　神を信じれば、この地上の人生の営み一つ一つが驚きに満ち味わい深いこととなるでしょう。朝目覚めれば、小鳥のさえずりが聞こえ、体が起こされて、この地で実ったコメを食べ、日光を受けて育ったレモンを絞って飲んで味わう、といった日常生活も又、神の業であり、私たちはそこに関わって、又、自分自身も神によって変えられていくのです。

　主イエスが十字架にかけられ死なれ、そして３日後によみがえられた、という事を、まだ信じられない、という方も、是非洗礼を受けて、この驚きに満ちた神の御業に生きるようにされますことを祈り願っています。

　さて、今日の聖書箇所は、主イエスが、人々によって山の崖の上から突き落とされそうになった、つまり殺されそうになった話です。幸いなことに、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られたので、ここで死ぬことはありませんでした。神の子として人々の前に顕れ、主の恵みの年が、今日、実現した、と言って、人々に恵みの言葉を語られた主イエスが、たちまちのうちに、迫害されてがけっぷちに立たされる、という展開もまことに驚きでありますが、

主イエスに全く信頼して委ねきっています、私たちクリスチャンにとっては、神をも亡き者にしようとする私たち人間の罪をすべて見通し、そこから逃れられる主イエスがやがて、わざと人間の罪を負って十字架で死なれて、よみがえられるという成り行きに安心しつつ又驚きをもって、主イエスをほめたたえるのです。

まだ主イエスのことを信じきれないでいる方は、どうぞ今日の聖書箇所から、私たち人間がいくら主イエスに対して罪深いことをしても、主イエスはいなくならないで、しかも私たちをいつまでも守ろうとされていることを覚えていただきたいと思います。

 今日の聖書箇所の２２節、「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」 」と皆が言った、ということを黙想しますと、いろいろな思いが沸き起こってきます。いつもの通り安息日にナザレにある会堂に集められた人々は、いつもの通りではない、今までの預言者とは違う、主イエスの恵み深い言葉に驚いたのです。そしてイエスを歓迎し、彼をほめさえしたのです。ナザレというのは主イエスがその少年青年期を家族と共に過ごされた、故郷の地であります。ナザレの街で、主イエスは成長し、神と人に愛されていました。

しかし、今、目の前に居るイエスは、その青年期の姿とは、見違えるほどに代わっていたのではないでしょうか。ですから、人々はその恵み深い言葉を耳にしたとき、そこにある恵みの深さに驚くと同時に、それを語るイエスの変わりっぷりにも驚いたのだと思います。もちろん主イエスは変えられて、またナザレという故郷の町にやってきたのです。主イエスもヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられて、今は神の子とされて、父なる神の御心を行うために、今ここに臨んでおられるのです。

しかし、故郷の人々はと言えばまだ変えられてはいなかったのです。せっかく、主イエスが人々の耳を震わせて、主の恵みの年の実現を告げ知らせたのに、その恵みのみ言葉によっては、人々は変えられなかったという事です。まだその時は来ていなかったというべきでしょうか。

そのようなわけで、「この人はヨセフの子ではないか」という一言には、人々のイエスに対する率直な思いが凝縮しています。

主の恵みの年の実現を告げる主イエスのことを、人々は普通ではない、並外れた能力を持つ人のようにとらえたのでありましょう。日本の地方にも、よくまれ人がやってきて、まれ人がその地方の為に貢献してくれた、という話が残されておりますが、ですからこのようなスーパーマンは、史上数知れず、この地上に生まれたのです。そしてスーパーマンは人として、並み居る人々の為に、驚くような良い技をしてくれて、人々は苦しみから助け出されて幸せになりました、というのがその典型的な成り行きですが、今日の聖書箇所を読みますと、どうやら主イエス様は、そのスーパーマンのたぐいとは、まったく別のお方であることが分かります。

では主イエス様はどなたかと言いますと、それは一言でいえば神の子であるという事です。しかも神の独り子なのです。ですから私たちが思い描くような必要に応じて次々に顕れてくれるようなスーパーマンとは全く違うのです。ですから、その史上一回限りの神の子が、私たち人間の中に一回限り下って来られて、そして、主の恵みの年の実現を告げられた、というのは、まったく信じるに足る出来事なのです。かつ恐れ驚くべき出来事なのです。

ナザレの人々はその神の子イエスを、「この人はヨセフの子ではないか」と言って触れ回ったのです。

確かにこの人々の言葉は神の子としての主イエスを思わない、罪な発言でありましょう。しかし、長年ナザレの街で、イエスを愛してきた人々からしてみれば、このように発言するのも又人情であるともいえるでしょう。しかし、その人情にいつまでもほだされていては、主の恵みの年に入れられることはないのです。先ほど、主イエスの恵みの言葉によって、すぐに人々が変えられて、すぐに主の恵みの年が実現したわけではなかった理由が、その時は来ていなかったことにあると申し上げましたが、より具体的には、人々の間にあるこの人情をどうにかしなければ人々が変えられることはないのです。

人情というのはいくら情熱的に美しく尋ね求めても、その身内びいきをやめることが出来ません。

今日語られました招きの言葉「また主の言葉がエリヤに臨んだ。「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」」このような主のみ言葉がエリヤに告げられ、エリヤはサレプタのやもめのところへと向かいましたが、言うまでもなくそれはエリヤがサレプタのやもめを人情でもって思いやって出かけたのではなく、ただエリヤは主の言葉に従ってその通りに行ったのでした。そしてエリヤは、息子と住むそのやもめに対して、一個のパンを求めるのですが、自分たちの最後のパン種しか残っていなかったやもめは、まずそれでエリヤの為にパンを焼いたのでした。そのようにしてこの３人は、幾日も食べつなぐことができたという事です。そしてこの生活を支えたのも、主の次のようなみ言葉「主が地の面に雨を降らせる日まで／壺つぼの粉は尽きることなく／瓶かめの油はなくならない。」が彼らに臨んでいたからなのです。

私たちは、このエリヤとサレプタのやもめの話から、人情によってつながっていく人間社会のある意味での窮屈さから、全く解き放たれた喜び、そして生活の確かさをも見出すことが出来るでしょう。「主が地の面に雨を降らせる日まで／壺つぼの粉は尽きることなく／瓶かめの油はなくならない。」という驚くべき主のみ言葉を私たちが信じるとき、私たちは主なる神が時に適って、私たちにふり注がれる恵みの数々を、間違いなく受けとることが出来る器へと変えられていることでしょう。

主イエスは「この人はヨセフの子ではないか」と呼ばわるナザレの人々にして、一貫して挑発的で、わざと怒らせるような言葉の数々を投げかけます。人々はスーパーマンになった主イエスが、自分たちの願いをすべて、その通りかなえてくれるものと期待したことでしょう。

そのような人々に対して、本当に主イエスの恵みのみ言葉は聞かれていたのでしょうか。その恵みのみ言葉は確かに彼らの耳を震わせましたが、未だ、彼らの想いと言葉と行いとを変えるには至っていないと言わざるを得ません。まだその時が来ていなかったのです。そんな彼らにイエス様の言葉と行いが臨んだのです。それはナザレの街に驚きの展開をもたらしました。会堂内でイエスの言葉を聞いていた人々は皆、憤慨しカンカンに怒って、総立ちになって、イエスを街の外へ追い出し、町が立っている山の崖まで連れていき、そこからイエスを突き落とそうとしたのです。つまりこれは集団暴行殺人未遂です。又、この出来事は、主イエスが十字架にかけられたことにも比べられるかもしれません。主イエスが自分の命を懸けて、この時人々に示したかったこととは何でしょうか。

主イエスは、主の恵みの年は永遠に続くということを、示したかったのではないでしょうか。なんでも願いをかなえてくれる驚くべき存在として、主イエスのことを見出したナザレの人々は、自分たちの願いや、自分たちの人情にますます縛られるようになったでありましょう。しかしそもそも人間の願いや人情ははかないものです。人間の思い描く願い事は、たとえそれがかなえられたとしても、その満足は長続きせず、人は又別の願い事を立ててその成就を願う。この成り行きは別に驚くべきことでもなんでもなくて、或る意味私たちが実際にその人生で経験していることです。私たちはこの世においてこのような成り行きが一つの習い性になっているのです。

ナザレの会堂に集っていた人々はもちろん神の言葉を聞きに集っていたのでありましょうが、そこにもまた、このようなはかない願望を抱くような習い性がはびこっていたのではないでしょか。ですから、一瞬、主イエスの恵みの年を告げるみ言葉に驚かされた、この人々ですが、彼らはそのみ言葉を保つことが出来ず、そして「この人はヨセフの子ではないか」という言葉が口をついて出てきたのでした。このように変わらない人々を、主イエスは続けて驚かされるのです。主イエスの口から繰り出される、人々の耳に痛い言葉の数々も、或る意味、人々にとって恵みのみ言葉ではないでしょうか。人々は、少なくとも主イエスのこの挑発の言葉は聞き逃さなかったのです。このように聞かれたみ言葉は、人々を知らない間に確実に変えていくことでしょう。私たちは時に、主イエスとけんかをしてもよいかもしれません。ヤコブが神ととっくみあいの格闘をしたように、私たちも主イエスと忌憚なく交わることが必要です。そして、時に主イエスから、耳の痛い言葉を聞かされることもありますが、それによって私たちは必ず生かされます。しゅイエスは人々の間を通り抜けてナザレを後にし、又別の地で人々に話をし、その権威ある言葉に人々は驚きました。

このような道行をたどって、主の恵みの年が永遠に実現する終末に、私たちは向かわされています。「主が地の面に雨を降らせる日まで／壺つぼの粉は尽きることなく／瓶かめの油はなくならない。」という主の恵みのみ言葉を信じて、この一週間も主と共に安心して歩んでまいりましょう。

お祈りします

天に居ます私たちの

今日は、ナザレのふるさとの人たちから、主イエスが全てを見通して私たちと共に永遠の神の国へと歩んでくださることを知らされました。罪深い私たちの行いを身に受けつつも、み言葉を下さり、私たちから逃れつつも又再びやって来られるその御業に感謝いたします。私たちも、困難に打ちひしがれるこの時に、ひたすらに祈り求め、この時にふさわしい恵みのみ言葉が与えられますように。

今のこの地上は、地に覆われるところ全て、日照りによって飢餓が引き起こされたような、霊性の飢餓に見舞われています。私たちは恵まれることから遠ざけられ、恵まれることが分からなくなっています。どうか今一度私たちが命を恵んでくださったあなたに立ち返り、恵みを受ける器へと変えてくださいますように。

あなたの計り知れないご計画を覚えます。私たちの目には不条理に映ることも、あなたが一つ一つ配置なさったことです。どうか、私たちが今、苦しみ、悲しみの中にありましても、あなたに激しく祈り求め、救いの御業へと参与していくことが出来ますように。

父と聖霊と共に